

ヴァルドルフ幼児教育におけるカリキュラムに関する一考察 ——季節に応じたカリキュラムに焦点を当てて——

近藤千草*

A Study of the Curriculum in Waldorf Early Childhood Education Focus on the Seasonal Curriculum

Chigusa KONDO

要 旨

本稿は、シュタイナーの人間観に基づくヴァルドルフ幼児教育のカリキュラムに着目し、その中でも「季節に応じたカリキュラム」に焦点を当て、その実態と意義を考察する。ドイツのヴァルドルフ幼稚園における季節のカリキュラムには、日々の保育の連続性の中に、季節に応じた行事や祝祭が自然な形で取り込まれ、継続的に活動が展開される点に特徴がある。カリキュラムを通し、自然や宇宙の力、そこに関わる人間に対する畏敬の念や感謝の気持ちを育むと共に、繰り返される豊かな感覚的印象を通して、行事や祝祭の背後にある世界との関連を感じ取る力を養い、季節と行事・祝祭に対する想像力の源泉を築くカリキュラムとなっている。我が国の季節のカリキュラムの実践例として、ヴァルドルフ幼稚園である「なのはな園」で行われた夏祭りを取り挙げた。太陽が一番高い位置に達し、光り輝き、人間の自我も解放され、天界の力を強く感じる夏という季節に対し、なのはな園では「風・水・火」の要素を取り入れた活動を通し、自然の力と行事とを関連づけた取り組みを行っていた。季節に応じたカリキュラムを構成する意義は、季節の喜びを全身体、全感覚を通して味わい、自然の力に対する畏敬の念や、生命に対する感謝の気持ち、自然と共に生きることの素晴らしさ等の感性の育みに寄与することが推察された。

キーワード：ヴァルドルフ幼児教育、保育カリキュラム、季節の行事

*教授 教育学

1. はじめに

ルドルフ・シュタイナー (Rudolf Steiner 1861-1925) の教育思想に基づく幼稚園は、1926年にエリザベス・グルネリウス (Elisabeth Marie Adelheid von Grunelius 1895-1989) により、自由ヴァルドルフ学校 (Freie Waldorf Schule) の附属幼稚園として創設された (以下、ヴァルドルフ幼稚園と示す)。シュタイナーは、幼稚園の創設を熱望していたが、当時の財政上の問題や幼児教育の価値に対する認識の脆弱性から、シュタイナーの存命中に幼稚園の創設はなし得なかった¹⁾。シュタイナーの幼児教育に対する思いや重要性を受け止めたグルネリウスは、幼稚園設立へと向かう。グルネリウスは2つの保育者養成校で幼児教育を学んでいるが、シュタイナーの教育思想に基づく幼児教育の中心的課題とされる「瞑想」と「模倣」による教育を行うことは初めての体験であり、不安を抱えていた²⁾。幼稚園は1926年に創設され、実践を重ねたグルネリウスは、1950年に『幼児教育とヴァルドルフ学校計画』 (Early Childhood and Waldorf School Plan) を英語で執筆、出版し、アメリカで反響を得る。1964年には、加筆されドイツ語にて出版された。我が国では、1981年に『七歳までの人間教育 シュタイナー幼稚園と幼児教育』として高橋巖・高橋弘子により翻訳され出版されている。本書は、シュタイナーの思想に基づく幼児教育の基本や発達理解、家庭での育児、幼稚園における保育内容、幼稚園の設計と設備等、ヴァルドルフ幼稚園の基本情報が載せられており、ヴァルドルフ幼児教育に携わる者にとってのバイブル的存在となっている。

本書には、フライア・ヤフケ (Freya Jaffke 1937-) ³⁾による「ヴァルドルフ幼稚園のカリキュラム」が載せられている。ヤフケが“Die Erziehungskunst”にカリキュラムを紹介したのは、1977年のことであり、幼稚園の設立から51年経っていることから、設立当初から同じカリキュラムであるかは定かではないが、グルネリウスが幼稚園の全貌を初めて記した文献に記載されていることから、設立当初から貫かれたカリキュラムであるとも推察可能である。グルネリウスが設立時にドイツのシュツットガルトで作成したカリキュラムや、その他、草創期の設立に関連する書類は現在は未確認のため、調査していくと今後の課題とした上で、ヤフケの記したカリキュラムを現時点で把握できる初期のカリキュラムとして本稿では位置付け、その内容の整理を試みたい。ヤフケの示したカリキュラムは、現在も基本とされ、我が国におけるヴァルドルフ幼児教育施設においては、風土や文化等の特性を加味してカリキュラムを構成している。ヴァルドルフ幼稚園におけるカリキュラム内容を明らかにすることで、ヴァルドルフ幼稚園の特徴が浮き彫りになると共に、ヴァルドルフ幼児教育の目指す方向性や、ヴァルドルフ幼児教育を通した子どもの育み等が明らかになると思われる。しかし、ヴァルドルフ幼児教育に

関するこれまでの研究は、音楽表現、ライゲン、描画活動、メルヘンの語りきかせ等、保育内容を個別に分析するものや、蜜蝋粘土、遊具等の保育教材に関するもの、教育思想や教育観についての研究が多く見られ⁴⁾、ヴァルドルフ幼稚園の「カリキュラム」の観点から調査・分析した研究は未だ見られない。カリキュラムは、どの国の幼児教育施設や機関においても保育の価値を反映させ、保育の骨格を構成する重要な位置にある。そこで本稿では、ヴァルドルフ幼稚園初期のカリキュラムを概観すると共に、カリキュラムの中でも特徴的である「季節に応じたカリキュラム」に焦点を当て、その内容を明らかにすることで、子どもの育ちに寄与するカリキュラムの意義を考察したい。また、我が国におけるヴァルドルフ幼児教育の実践例として、東京三鷹市にある「キンダーガルテンなのはな園」（以下、なのはな園と示す）の夏祭りの事例を取り上げ、カリキュラム内容と実践について明らかにしたい。

2. ヴァルドルフ幼稚園初期のカリキュラム

ヴァルドルフ幼稚園の創設者であるグルネリウスが、長年の保育実践を著した『七歳までの人間教育—シュタイナー幼稚園と幼児教育』には、ヴァルドルフ幼児教育の基本として、子どもの発達理解や家庭での育児、幼稚園における保育内容や設計・設備等について載せられている。本書には、“Die Erziehungskunst”（1977年8月号）誌にフライア・ヤフケが記した「ヴァルドルフ幼稚園のカリキュラム」が載せられている。ヤフケが示すヴァルドルフ幼稚園のカリキュラムとは、①体験の繰り返し、②保育者自身の自己教育、③一日の時間割り、④一週間のプランにおける芸術活動、⑤おやつ献立、⑥四季に応じたカリキュラムの一例、⑦保育者の役割の7項目である⁵⁾。

カリキュラムの具体的内容について整理していきたい。③一日の時間割り⁶⁾、④一週間のプランにおける芸術活動⁷⁾、⑤おやつ献立⁸⁾について内容を概観する。

一日の時間割は表1の通りである。保育の始まりは朝7時半からで12時には終了しており、現在のように昼食を採る形式は見られない。保育時間には自由遊びが多く設定されている。グルネリウスは、「シュタイナー幼稚園における教育は、幼い子供の本質が自由に自然な発達をとげる過程に干渉したり、まだ夢のなかにひたっている幼児の意識状態から引きずり出したりすることから幼児を守るために、あらゆる努力をしています」⁹⁾と述べ、遊びは子どもの発達にふさわしい方法や環境構成に基づいて行われ、子どもの意志を活発にさせることを重視している。また、散歩は、社会性の育みに寄与する内容として取り入れられている。帰りの際の活動には、童話を聞かせる時間を設定していることも特徴の一つである。語られる内容は、人間

表1 一日の時間割り

時 間	保 育 内 容
7:00	保育者集合
7:30～9:15	自由遊び
9:15～9:45	片付け 手洗い
9:45～10:00	リズム遊び
10:00～10:20	おやつ 庭へ出る準備
10:30～11:30	園庭での自由遊び（散歩）
11:30～11:45	靴の履き替え 手洗い 人形の手入れ お話コーナーへ集合
11:45～12:00	お別れの時間 童話

表2 一週間のプランにおける芸術活動

曜 日	芸術活動の内容
火曜日	水彩によるお絵かき
水曜日	リズム遊びの代わりにオイリュトミー
木曜日	蜜蝋粘土による彫塑
土曜日	週末の掃除

への洞察に貫かれているものが重要で、物語の具体的な描写を通じて、物語の登場人物が何をするのかという点に引き付けられていく体験を大切にする。同時に、童話の時間を通じて、共に聴いたり、話したりという雰囲気を感じることも重視される¹⁰⁾。

一日の時間割りの中に、曜日によって異なる芸術活動が取り入れられている（表2）。ヴァルドルフ教育において芸術活動は、身体を通して意志や感情に働きかける、人間全体の発達に即した方法として積極的に取り入れられている。水彩によるお絵かきは、色そのものに親しみ、色と色とが出会って新しい色へと変化したり、色の広がりを経験することが重要と見なす。オイリュトミー（Eurhythmic）についてグルネリウスは、「シュタイナーの創始した舞踏。音楽やリズムによって呼びおこされた自由なファンタジーによって踊る遊戯の一つ」¹¹⁾と説明している。音や響き、言葉の意味を身体で表現し、「子供のファンタジーをもっと美しく刺激する可能性をもっているもの」¹²⁾と認識されている。粘土の彫塑は、保育者が子どもの前でやって見せることで子どもは興味を持ち、真似したり、自身の作品として作り上げるなど、自由に取り組むことが重要とされ、作品の出来不出来を話したり、評価したり、論評を加えたりはし

ない。

おやつ献立もカリキュラムとして説明されている（表3）。おやつには栄養価の高い素材を用いたメニューが並ぶ。我が国のシュタイナー園においても、子どもの登園と共に保育者がおやつを作り始め、関心を持った子どもは手伝いをし、おやつの時間に提供される。おやつ作りは子どもの活動の一つであり、カリキュラムとして位置づけられる。

次に、⑥「四季に応じたカリキュラムの一例」¹³⁾については、表4に示すように4つの事例が挙げられている。四季に応じたカリキュラムを概観すると、季節と自然、行事、習慣との関連が見られ、生活に即した身近な内容が保育内容として取り入れられていることがわかる。収穫祭に向けて収穫される自然物は、生活上の身近な場所である園庭や散歩の過程で集められる。祝祭の日には、テーマに応じた活動が取り入れられ、祝祭の意味を実体験に基づいて理解できる工夫がなされている。大掃除は、11月中旬から降臨節までの長期にわたって取り組まれる点に特徴がある。祝祭に関連して用いられる物は、「木製玩具、布やテーブルクロス、布製の人形、樹の皮の舟、松かさの小鳥、羊毛を使った羊」と示される通り、ヴァルドルフ幼稚園では自然素材が遊具として用意される。

「①体験の繰り返し」では、日々の保育が「四季の自然と祭」と結び付きながら、「リズムとくりかえし」の中で「手本と模倣」¹⁴⁾により体験される。取り上げられる行事は、保育の活動として何度も繰り返され、創造的な体験へと導き、子どもに畏敬の念や感謝の気持ちが生み出され、無意識のうちに子どもの内に取り込まれていくよう配慮される。そこで重要なことは、「②保育者自身の自己教育」に示されるように、保育者自身が成長する努力を怠らないことである。

「⑦保育者の役割」では、「豊かな出来事や活動のなかで、子供たちはつねに創造を喜ぶ雰囲気に取りまかれ、その雰囲気はどんなばあいにも子供たちの本質にかたりかけていくように配

表3 おやつの献立

曜日	献立の内容
月曜日	手製の蜂蜜とバター入りの塩パン 薬草茶 果物
火曜日	キビがゆ お茶 果物
水曜日	小麦を引き割にしたかゆ お茶 果物
木曜日	ミュスリ（果物、穀物、くるみ、ほしぶどう、蜂蜜をミルクで混ぜ合わせたもの）
金曜日	小麦を煮て蜂蜜、ミルク、果物と混ぜ合わせたもの
土曜日	引き割りつぶ入りパン お茶 果物

表4 四季に応じたカリキュラムの一例

カリキュラム	活 動 内 容
① 夏のおわりの五、六週間	<ul style="list-style-type: none"> • 保育者が種々の穀物の穂を集め、木の丸太で打穀、ひき臼で小麦粉にしてパンを焼く。 • 稲穂は輪に結んで壁にかけ、小鳥の巣箱に新しい藁屋根をかける。 • 残った藁は燃やす。 • 梨やリンゴもぎをする。 • 農家の仕事を盛り込んだ歌遊びを行う。
② 収穫祭	<ul style="list-style-type: none"> • 自然が熟し実り始めた頃から取り組まれる。 • 園庭や散歩の途中で、ニンジン、バラの実、栗、どんぐり、花、色づいた葉、ぶなの実などを集める。 • 収穫祭の日は、「収穫祭のテーブル」を作り、子どもと両親とで収穫の演舞を踊る。 • 両親と一緒に収穫祭のテーブルの周りで車座になっておやつを頂く。 • 収穫祭の後、園庭の花壇を子どもと一緒に掘り起こし、花の球根をより分け植える。 • 冬の堆肥を用意する。 • 秋のリズム遊びをする。
③ ちょうちん祭	<ul style="list-style-type: none"> • 聖マルティン祭のことを指し、11月11日に祝われる。 • チーズの空き箱を切り開き、水彩絵の具で色を塗った後、紙が透き通る様に油を塗り、貼り合わせてちょうちんの形にする。 • ジャがいもと銀箔でろうそく立てを作り、ちょうちんの中に貼り付ける。 • 庭や公園で棒を集め、ケーキを焼く。 • リズム遊びやろうそくを持って小人ごっこをする。 • 公園をちょうちん行列をした後、両親たちが門や橋を作り、先生と子どもがくぐり抜ける。 • 歌を歌う。
④ 大掃除の期間	<ul style="list-style-type: none"> • 11月中旬から降臨節までの期間は、大掃除をする期間となる。 • 木製玩具から蜜蝋や樹脂の汚れを落とす。 • 布やテーブルクロス、布製の人形を洗濯、アイロンがけをして修繕する。 • 引き出しや棚を掃除し、椅子や腰かけ、机の艶出しをして磨き上げる。 • 積み木を作り一組ごとにまとめ、色々な人形、樹の皮の舟、松かさの小鳥、羊毛を使った羊を作り、バザーの準備を行う。 • クリスマスのための馬小屋の人形やペットを作る。

慮」¹⁵⁾することが求められる。保育者が行う仕事は、筋道を立て、仕事にふさわしい道具を用い、終わる時には片付けるという一連の意味ある行動を示すことであり、後の論理的思考力の基盤となると考えられている。

以上から、ヴァルドルフ幼稚園におけるカリキュラムには、保育の方法論としての「繰り返し」や、保育者自身を高めていく「自己教育」、シュタイナーの人間理解に基づく「本質の捉え」等、他の幼児教育には見られないカリキュラムが構成されていることがわかる。

3. ドイツにおける「四季に応じたカリキュラム」の実践例

現在、ヴァルドルフ幼稚園は、世界 73 カ国 1919 園に広がっているが¹⁶⁾、各園において自然、文化、環境等の条件に基づき、それぞれの土地にふさわしい保育内容や方法によりカリキュラムが構成されている。ヴァルドルフ幼稚園発祥の地、ドイツにおける季節に応じたカリキュラムについては、ヤフケが、“Feste in Kindergarten und Elternhaus Teil 1” (2007)、“Feste in Kindergarten und Elternhaus Teil 2” (2004) の中で紹介しており、我が国では、2012 年に『子どものための四季の祝祭 シュタイナー幼児教育の現場から』として翻訳されている。ここでは、ヤフケが“Die Erziehungskunst”の中でも紹介した「夏祭り」、「収穫の時期のカリキュラム」、「ちょうちんの季節のカリキュラム」に焦点を当て、カリキュラムの実践について概観したい。

3-1. 夏祭り

夏祭りは、聖ヨハネ祭と結び付けられ祝われている。夏という季節は、太陽が一番高い位置に達し、光り輝き暖かい世界が広がり、自然物が伸び行くのと同時に人間の自我も解放され、天界の力を強く感じる時期と認識する。ヤフケは、「歌って踊って、外に出て外気にふれ、光と暖かさを感じ、水や砂で遊び、この全てが子どもたちにとっての夏なのです」¹⁸⁾と述べるように、子どもは夏の喜びを全感覚で味わうことが大切である。シュタイナーは、『魂の暦』(Anthroposophischer Seelenkalender)¹⁹⁾という復活祭から始まる 1 年をめぐる季節の独自の営みを詩として表しており、その週に生起する自然の歩みとの健やかな一体感を体験する内容となっている。ヴァルドルフ幼稚園の教師が、聖ヨハネ祭や夏祭りを祝するための心情形成に寄与するものとして詩の朗読を取り入れている。

保育者自身が意識的に夏の特性を認識することで、子どもは夏の自然や動物に興味を持ち、向き合うようになる。そこで、保育室内にも花を生けたり、空になった鳥の巣を置いたり、羊毛で蝶々を作り飾ったり、夏の雰囲気を感じ取れる環境構成を図っていく。園庭には「聖ヨハネ祭の焚火」を用意し、薪や古くなって燃やしてもよい物を準備し火を付ける。燃え上がる様子に子どもは歓声を上げるが、焚火には敬意を持ち、焚火の周りでは決して遊んだりはしない。

夏祭りは、聖ヨハネ祭の一環として行われ、この日には、子どもたちは花で作られた冠をかぶり、庭で保護者も参加し、夏祭りのために準備された遊びを行う。庭には、様々な色の紙テープをかける。夏祭りで用いられるボールは、布の中心に小石を入れ、包み込む際に色とりどりの紙テープを挟み込んで作成する。中央に鈴を取り付けた輪も準備する。輪の鈴をめがけ

てボールを投げると、色とりどりの紙テープが揺れ動きながら落ちてくるが、この姿は「夏の季節と夏至の象徴」²⁰⁾とされる。また、魚釣りのコーナーや、木、石、板などを使った障害物競走をして遊び、夏の雰囲気を感じ取る。

3-2. 収穫の時期のカリキュラム

収穫の時期のカリキュラムは、食物が実る頃から収穫祭に至るまでの期間で取り組まれる。ヴァルドルフ幼児教育では、感謝の念を育むことは重要な課題と認識し、特に、大地からの恵みを得る収穫時期に、太陽や風、雨、動物、収穫に導く人間の力など、多様なものに対して感謝の念を抱くことができるよう環境を整える。ヴァルドルフ幼児教育における学びの中心は、子ども自身による模倣を通じた学びであり、感謝の念に対する育みも保育者の行為の模倣を通しなされていく。

そこで、秋の収穫時になると、保育室には収穫された秋の果物や穀物が取り入れられ、調理されたり、物の変化に与ったりと、子どもの身近な場面で視覚や嗅覚、触覚等を通して収穫そのものを感じ取ることができる環境となっていく。準備された藁は、収穫祭用のリースとなるが、子ども達は何日にもわたり、藁の上に乗ったり、適当な大きさに切ったり、遊びに用いたり、アドベント用のクリップを作ったりと、様々な形で藁と向き合っていく。散歩の過程においても秋の草木や実などを拾い集め、収穫祭用の素材として用いられる。残った藁はたき火で燃やされる。麦の穂は脱穀されるが、子どもたちは木の棒で穂をたたき、粒を出す作業が続けられる。粒は手臼で粉にされ、粉は感謝祭のためのパンとなる。

収穫祭の日に子どもたちは、籠の中に庭で取れた果物や野菜、あるいは散歩時に見つけた物等を入れて持ってくる。保育室には祭壇が作られ、祭壇には持参した籠や花、稲穂、蠟燭、焼かれたパン等が供えられる。収穫祭の活動は、まず収穫のリズム遊びから始まり、その後、祭壇の周りに輪になって座る。蠟燭に火をつけ、「大地が私たちにこれらをもってきてくれて太陽がそれらを熟してくれた 最愛なる太陽よ、最愛なる大地よ あなたたちのことを決して忘れはしない」(クリスティアン・モルゲンシュテルン)²¹⁾の詩を唱える。その後、パンが一人ひとりの手に渡され静かに味わって食べ、子どもが持参した果物を切り分ける。食べ終わる際には、「食べ物と飲み物に私たちはありがとうございます」というお祈りの言葉を述べる。この間、外では両親が焚火でジャガイモを焼いており、子どもたちは火を見つめたり、外遊びをしたり、焚火の手伝いなどをしてジャガイモが焼けるまで過ごす。会の最後は、子どもたちも手伝って作った花や穀物を穂で束ねた花束を受け取る。

以上の収穫の時期のカリキュラムより、穀物が実り、小麦を脱穀し、麦がパンや花束に変化

する一連の過程を経験することで、収穫祭の当日は、積み重ねられた感謝の気持ちを最も強く感じることができる。また、収穫祭の後も、子どもたちが幼稚園に持ってきた果物や野菜を登場させることにより、事後にも食物に対する感謝や生命に対する畏敬の念が続いていく。日々の保育の中に取り込まれた収穫に関わるカリキュラムが、生活や遊びにおいて継続的に展開されることにより、感謝や畏敬の念を子ども自身が直接体験していくことができるカリキュラムとなっていることがわかる。

3-3. ちょうちんの季節のカリキュラム

ちょうちん祭りとは、11月11日に祝われる聖マルティン祭（St. Martin）のことを指す。この季節には、草木を刈り込んだり、球根を植えたり、落葉を集め堆肥を作ったりと、冬支度をする時期でもある。ドイツではこの時期にちょうちんに火を灯し歩く行事があり、幼稚園では、水彩絵の具で色付けした紙にオイルを塗り、チーズの空箱に張り付けてちょうちんを作成する。ちょうちん祭りの当日には、親と共に集まり、人形劇を見た後にリンゴケーキを食べ、ちょうちんに火を灯して公園まで歩く。公園で待っていた親が花道をつくり、そこを子どもたちが通り抜ける。祭りの後もちょうちんに火を灯して遊ぶ場所までちょうちんを大事に運ぶ経験が積み重ねられていく。ちょうちんを持ち運ぶことにより、通常の遊びに火を運ぶ特別な行為も加わり、明るさと闇との両感覚を実感することができる。

4. なのはな園における夏祭り

なのはな園は、1994年に創立し、現在は3歳から5歳を対象とした定員30名の一般社団法人によるヴァルドルフ幼稚園である。シュタイナーの人間観に基づき、自由遊び、ライゲン、オイリュトミー、散歩、季節のリズムとしての祝祭等を主たる保育内容としてカリキュラム構成している。保育には、「季節のリズムとしての祝祭」が位置付けられ、「夏祭り、収穫感謝祭、クリスマス、おもちつき、節分、ひな祭り等の祝祭」が行われている。本稿では、筆者が参与観察した夏祭りに焦点を当て、その内容と意義を考察したい。

4-1. 夏祭りに向けた保育の環境構成

筆者は、2018年7月18日、なのはな園の夏祭りに参与観察に入った。保育室には、写真1・2のように、季節のテーブルが作られている。

季節に応じたカリキュラムを構成するものの一つに、「季節のテーブル」がある。季節のテー



写真1 季節のテーブル①



写真2 季節のテーブル②

なのはな園の夏のテーブル（2018年7月18日、筆者撮影）

ブルとは、その季節に特徴的な自然や、祝祭に関連する背景を一つのテーブルに現わし、保育環境の中で視覚的にそれらを味わう環境構成の一つである。ヤフケは、「季節のテーブル」が、子どもの祝祭の意味を感覚的印象から理解すると共に、祝祭とその背景にある世界との関連を直接体験する意味を持つことについて次のように述べている。

私たちが季節の自然の流れとともにキリスト教的な祝祭を祝おうとすれば、特に大切なのが季節のテーブルです。自然の恵みが私たちに何をプレゼントしてくれ、祝いにどのような意味があるのかはテーブルの飾りつけでわかります。家の外にはどのようなものが実り繁茂し枯死しているか、そして2000年前に世界を変えた出来事の何が今も生き続けているか愛情深く興味を注ぎ、祝祭の背景を広範囲にわたって理解しようと努力します。祝祭の背景を理解することにより私たちにも神秘的な世界を子どもたちにどのように視覚的に仕上げるができるかなどについてのアイデアがうかんできます。子どもは毎年くり返される豊かな感覚的印象を通して、説明したり教えたりしなくても、祝祭とその背景にある世界との関連を直接体験します。年齢とともに徐々に祝う事に目覚めていく子どもの魂に対して、年齢が加わるにつれて、次々に新しい意味関連が明らかになっていくのです。²²⁾

写真にある季節のテーブルのテーブルクロスは黄色で、花瓶には水色の布が巻き付けられている。ヤフケは、「その季節に合った感じの色のクロスを敷きます」²³⁾、「夏から聖ヨハネ祭（6

月 24 日夏至) にかけては黄色になります。秋から聖ミカエル祭 (9 月 29 日) にかけての時期は濃く温かい赤になります」²⁴⁾との記述と一致する。夏祭りは聖ヨハネ祭の一環でもあり、6 月 24 日のヨハネの誕生を彷彿させ、子どもの誕生が描かれている「システイーナの聖母」(ラファエロ・サンティ) は、季節のテーブルにふさわしい絵画と考えられている。ほおずきが飾られ、日本の伝統文化も取り入れられている。

4-2. 夏祭りの保育内容と流れ

なのはな園における夏祭りの保育内容と流れについては、表 5 に示す。

なのはな園における夏祭りの流れと内容から、ヤフケが紹介した聖ヨハネ祭と夏祭りに関する一連の取り組みと同様であることがわかる。ヨハネ祭の焚火では主に薪が使われていたが、なのはな園では、7 月 7 日に取り組まれた七夕の笹飾りが用いられ、我が国の伝統的な祝祭と保育内容をつなぐ工夫が、また、ボールは羊毛で作られ、魚釣りではコルクに葉を結びつけ魚に見立てる工夫があった。障害物競走の取り組みに対し、なのはな園では、小石を拾い集める活動に変化させていた。このような遊びには、ボールを投げて鈴を鳴らしはらはらと落ちていく「風」の要素、魚釣りでは「水」の要素、七夕の笹飾りを燃やす「火」の要素が入っており、導入で行ったライゲンの内容と一致が見られる。夏の季節に見られる自然界の風、水、火の要素に対し、遊びを通して感じるができる活動となっており、季節ならではの祝祭の意味を感じ取ることができる。

表 5 夏祭りの保育内容と流れ

時 間	保育の流れと内容
8:15 ~ 8:45	(1) 保育室内及び園庭への物の配置と準備 <ul style="list-style-type: none"> • その他：蚊取り線香（玄関、窓際等数カ所に設置）
8:45 ~ 9:10	(2) 子どもの登園 <ul style="list-style-type: none"> • 保育室に設定された指定の場所に順次座っていく。 • 保育者が手遊びをして全員がそろうのを待つ。
9:10 ~ 9:20	(3) ライゲン：夏祭りに関連した内容「風・水・火」を行う。
9:20 ~ 9:25	(4) 本日の活動内容と流れを伝える。 〈活動内容について〉 <ul style="list-style-type: none"> • 「輪通し」では輪に球を 3 回投げて鈴を鳴らす。 • 「白い石探し」を行う。クラスによって探す場所が異なる。 • 「魚釣り」をする。 • 製作した小物入れに、探した白い石や釣った魚を入れる。 • 終えた子どもは、砂場の縁に座って待つ。 〈行動の仕方について〉 <ul style="list-style-type: none"> • 保育者に呼ばれた者同士が組になり、手をつないで行動する。 • 呼ばれた組から園庭へ出る。

9:25 ~ 9:35

- (5) 園庭に出る。
- 帽子をかぶり，蚊よけ用に上着を着る。
 - 組ごとに園庭へ順次出る。
 - 蚊よけのスプレーをかけてもらう。

9:35 ~ 11:40

- (6) 夏祭りの活動をする。

9:35 ~ 9:50

① 輪通し



- 輪通しのボールを投げる位置で並んで待つ。
- 保育者が見本を見せる。
- 一人につき3球投げる。
- 保育者と保護者1名が援助する。(輪を持つ，球を子どもに渡す)
- 輪通しが終わった後，順次次の活動場所にペアで移動する。
- 保護者が2カ所に立ちサポートする。

9:50 ~ 10:15

② 小石見つけ



- 園庭に隠された白い石を見つける。

10:15 ~ 10:20

③ 魚釣り



- 竿を使って葉とコルクで作られた魚を釣り上げる。

10:20～10:30

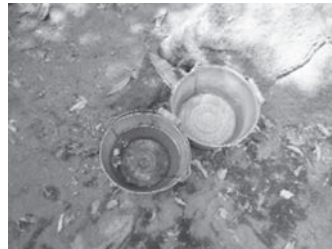
④収穫したものを箱に入れる。



- 活動を終了した子どもは、各自が製作した小物入れに収穫した小石や魚を入れる。

10:30～10:40

⑤焚火



- 子どもは砂場の縁に腰掛ける。
- 焚火は砂場から離れたところに設置する。
- バケツに水を用意する。
- 保育者が火を付け、七夕で用いた笹飾りを燃やす。
- 保育者は、笹飾りが炎、煙と共に天に還ることを告げる。

10:40～10:55

⑥保育室へ戻りおやつを頂く。

- 子どもは、手洗い、排泄を済ませてから、自分の席に着く。
- 保護者によるおやつの準備（お茶、スイカ）後、おやつを頂く。

10:55～11:20

⑦人形劇を鑑賞する。

- 名前を呼ばれた子どもから、隣の部屋へ移動する。
- 保育者が実演する人形劇を鑑賞する。

11:20～11:40

⑧帰りの集まりをする。

- 帰り支度をし、準備ができた子どもから園庭へ出る。
- 砂場の縁に座って待つ。
- 保育者より明日から夏休みに入ることが告げられる。

- 保護者により歌が披露される。
- 子ども一人ひとりにはおずきが配られる。



11:40～

- 夏祭り終了後
 - 降園しない子どもは、園外の遊び場所に移動する。
 - 保護者による園内の大掃除が行われる。

5. まとめ

本稿では、ヴァルドルフ幼稚園のカリキュラムに焦点を当て、ヤフケが示した初期のカリキュラムを確認すると共に、ドイツのヴァルドルフ幼稚園で実践されている四季に応じたカリキュラムの中から、「夏祭り」、「収穫の時期のカリキュラム」、「ちょうちんの季節のカリキュラム」の実践内容について概観した。初期のヴァルドルフ幼稚園のカリキュラムには、保育者自身の自己教育の重要性や、子どもの認識方法として本質を捉える必要性が示されており、ヴァルドルフ幼児教育を支える根幹として位置づけられている。また、具体的な四季のカリキュラムからは、季節が持つ特徴や自然の力を認識し、季節の祝祭と組み合わせながら、自然に対する畏敬の念や感謝の心を育む活動が長期的に取り組まれ、祝祭を祝う日には、これまでの取り組まれた教育的な意義を最も感じられるものとしてカリキュラムが構成されていたことがわかった。

また、我が国における実践例として、なのはな園の夏祭りを取り上げ一連の流れを示した。ドイツにおける聖ヨハネ祭から夏祭りにかけての活動と同様に、なのはな園での夏祭りも、夏という季節に対して、自然や大地の力、宇宙の力を五感で感じ取ることのできる内容を取り入れていた。夏という季節は、「太陽が一番高い位置に達し、光り輝き暖かい世界が広がり、自然物が伸び行くのと同時に、人間の自我も解放され、天界の力を強く感じる時期」と説明されたように、なのはな園の夏祭りには、天界の力である、「風、水、火」の要素を認識する活動が取り入れられていた。風の要素は「輪通し」により、ボールに取り付けられた色とりどりの紐が揺れながら落ちてくる様子から実感し、水の要素は、コルクと植物で作られた魚釣りの遊

びを通して感じられ、火の要素は、七夕の笹飾りを燃やすことから、炎と煙が立ち上がり笹飾りに願いを込めた念が宇宙へと届けられる気持ちを味わった。このように、自然の力を感じることで活動の保育内容として盛り込み、ここでは夏という季節を全感覚を通して味わい、自然の生み出す生命への畏敬の念、自然と共に生きることへの感謝等の心情を実感することが、季節のカリキュラムを構成する意義であると捉えることができた。

このようなカリキュラムを構成する時に重要なことは、季節の行事や祝祭が特別なこととして単一で取り上げられるのではなく、季節の進行と共に、日々の保育の中で自然に取り入れられ、連続して向き合っていくことのできるような活動を展開するという点である。そのためには、保育者が季節の行事や祝祭を取り挙げることで、子どもなどのような部分の成長に寄与するのか熟考しなければならない。ヴァルドルフ幼児教育において季節ごとの祝祭の意義は、繰り返される豊かな感覚的印象を通して、行事や祝祭の背後にある世界との関連を感じ取る力を養い、季節と行事・祝祭に対する積極的な想像力の源泉を築くという点にある。そのためには、幼児期の発達にふさわしい方法、すなわち、全感覚を通して季節の行事・祝祭を感じ取ることができるような、眼に見える方法（例：季節のテーブル）、身体を動かして感じる方法（ライゲン）、物質的な物との対面を通す方法（散歩時の植物の収穫）、五感を通す方法（料理をして味わう）等、多様な方法を用いて、長期的な活動として構成していく必要がある。このような在り方は、ヴァルドルフ幼児教育のみならず広く一般に取り入れていくことのできる視点ではないかと考える。カリキュラムの持つ本質、つまり、カリキュラムがどのような人間形成に寄与するのかという観点を明確にし、揺るぎない信念のもとに実践することが重要な課題と思われる。

本稿では、ドイツにおける季節のカリキュラムの一部について、ヤフケの文献を中心に整理するにとどまったため、シュタイナーのカリキュラムに対する認識を著作・講演録等から抽出することが課題として残された。また、季節のカリキュラムの実践例として、なのはな園の夏祭りを取り挙げたが、保育の一連の流れの中で、どのように七夕へと向かい夏祭りと関連付けたのか、我が国ならではの自然理解と季節・祝祭との関連はいかにして行われるべきなのか、より一層深い理解と分析が必要である。シュタイナーの人間理解とその本質に向かう教育の原点を中心に置きながら、カリキュラムの詳細を分析していくことを今後の課題としたい。

註・引用文献

- 1) シュタイナーは、『シュタイナー教育講座Ⅰ子どもの健全な成長』の中で、「シュツットガルトの自由ヴァルドルフ学校に、すでに就学年齢に達した子どもたちを受け入れるのは、私にはいつも特別の苦痛です。幼児を自由ヴァルドルフ学校に受け入れることができるなら、私は深く満足するでしょう。しかし、その他の困難を度外視しても、一種の幼児校を設立することは、アントロポゾフィー（人智学）運動のあらゆる領域に、非常な資金繰りの困難をもたらすことになります。そのために、将来、ヴァルドルフ学校が世間からあまり敵対視されなかったら、幼児をヴァルドルフ学校に受け入れることを、せいぜい希望できるぐらいです」と幼稚園設立の困難について述べている。
ルドルフ・シュタイナー、西川隆範訳、2004、『子どもの健全な成長—シュタイナー教育基礎講座Ⅰ』（Einführung in anthroposophische Pädagogik I）、アルテ、p. 38
- 2) グルネリウスは幼稚園を引き受ける不安について、“Today it is perhaps difficult to imagine a time when no one had worked consciously with the imitative capacities of the child.”と述べている。
Susan Howard, 2005, The First Waldorf Kindergarten. The Beginning of Waldorf Early Childhood Movement, p. 22
- 3) 1960年からドイツ、ロイトリンゲンにある自由ゲオルグシュタイナー学校附属ヴァルドルフ幼稚園に勤務。1971年よりシュツットガルトのヴァルドルフ幼稚園教員養成ゼミナールにて教鞭をとる。1990年に幼稚園退職。世界各地のヴァルドルフ幼稚園教員養成ゼミナールにて教鞭をとる。
フライア・ヤフケ、村上祐子訳、2013、『子どものための四季の祝祭 シュタイナー幼児教育の現場から』（Feste in Kindergarten und Elternhaus）、涼風書林、著者紹介参照
- 4) 近藤千草、2018、「シュタイナー幼児教育の広がり」と研究動向に関する考察、『川村学園女子大学子ども学研究年報』、第三巻第一号、p. 84
- 5) E・M・グルネリウス、高橋巖・高橋弘子訳、1999、『七歳までの人間教育 シュタイナー幼稚園と幼児教育』、フレーベル館、pp. 116-125
- 6) 前掲書5)、p. 118
- 7) 前掲書5)、p. 119
- 8) 前掲書5)、pp. 119-120
- 9) 前掲書5)、p. 30
- 10) 前掲書5)、pp. 60-61
- 11) 前掲書5)、pp. 66-67
- 12) 前掲書5)、p. 67
- 13) 前掲書5)、pp. 120-123
- 14) 前掲書5)、p. 116
- 15) 前掲書5)、p. 123
- 16) Waldorf World List 2019
https://www.freundewaldorf.de/fileadmin/user_upload/images/Waldorf_World_List/Waldorf_World_List.pdf 2019年8月20日現在
- 17) フライア・ヤフケ、村上祐子訳、2013、『子どものための四季の祝祭 シュタイナー幼児教育の現場から』（Feste in Kindergarten und Elternhaus）、涼風書林、p. 56
- 18) 前掲書17)、p. 39

- 19) ルドルフ・シュタイナー, 秦理絵子訳, 2010, 『魂の暦』(Anthroposophischer Seelenkalender), イザラ書房, p. 31
「第12週 ヨハネ祭の気分 6月24日」を例に示す。
- | | |
|--------------------|----------------------------------|
| 世界の 美しい 輝き, | Der Welten Schönheitsglanz, |
| その輝きが わたしの命に 宿る | Er zwinget mich aus Seelentiefen |
| 神秘的な諸力を 魂の底から 解き放ち | Des Eigenlebens Götterkräfte |
| 宇宙へと 天翔けらせる。 | Zum Weltenfluge zu entbinden; |
| わたしは 自分を 後にして | Mich selber zu verlassen, |
| 信頼しつつ ただ みずからを | Vertrauend nur mich suchend |
| 宇宙の 光と熱の中に 探しもとめる。 | In Weltenlicht und Weltenwärme. |
- 20) 前掲書 17), p. 46
21) 前掲書 17), p. 56
22) 前掲書 17), p. 7
23) 前掲書 17), p. 7
24) 前掲書 17), p. 8

参考文献

- E・M・グルネリウス, 高橋巖・高橋弘子訳, 1999, 『七歳までの人間教育 シュタイナー幼稚園と幼児教育』, フレーベル館
フライア・ヤフケ, 村上祐子訳, 2013, 『子どものための四季の祝祭 シュタイナー幼児教育の現場から』(Feste in Kindergarten und Elternhaus), 涼風書林
広瀬俊雄, 2009, 『シュタイナーの人間観と教育方法—幼児期から青年期まで—』, ミネルヴァ書房
近藤千草, 2018, 「シュタイナー幼児教育の広がり」と研究動向に関する考察, 『川村学園女子大学子ども学研究年報』, 第三巻第一号
新田義之, 2012, 『日本の祝日と祝祭 シュタイナー幼児教育の充実のために』, 涼風書林
ルドルフ・シュタイナー, 西川隆範訳, 2004, 『子どもの健全な成長—シュタイナー教育基礎講座 I』(Einführung in anthroposophische Pädagogik I), アルテ
ルドルフ・シュタイナー, 秦理絵子訳, 2010, 『魂の暦』(Anthroposophischer Seelenkalender), イザラ書房
ルドルフ・シュタイナー, 松浦賢訳, 2001, 『完全版 霊学の観点からの子どもの教育』(Die Erziehung des Kindes von Gesichtspunkte der Geisteswissenschaft), イザラ書房
Susan Howard, 2005, The First Waldorf Kindergarten. The Beginning of Waldorf Early Childhood Movement.
ヴァルター・クロース, 伊藤壽浩訳, 2010, 『大地の四季—季節の錬金術について』(Das Jahr der Erde Von der Alchymie der Jahreszeiten), 涼風書林

近 藤 千 草

謝 辞

我が国における季節のカリキュラムの事例として、なのはな園の夏祭りの採用、及び画像の使用を許可下さいました、日本シュタイナー幼児教育協会代表理事 松浦園先生、及び参与観察においてお世話になりました、なのはな園の先生方に感謝申し上げます。